

先生になる皆さんへ

聴覚特別支援学校スクール
カウンセラーからのメッセージ

2018.05.08
井料美輝子

【1. 子どもの自己イメージは 大人が決める】

1. 「あなたは聞こえない子どものことを
どう思いますか？」

(1) 保護者からの質問

「子どもにいつどのように障害のことを教えたらいいでしょう
うか？」

(2) 子どもは大人が見ているとおりに自分を見ます

「この子はダメだ」→「私はダメなんだ」

「あなたのみままで大丈夫」→「私は大丈夫。」

2. 障害のとらえ方の変遷

(1) 医学モデル

障害は個人の問題。聴覚障害は悪。

少しでも聞こえるようになるのが良い(→人工内耳)

手話は言語として認められていなかった ことば＝日本語のみ
「100%聞こえないより50%聞こえる方がまし」

※「聞こえないあなたのみではダメだ」というとらえ方

(2) 文化・社会モデル(2006年障害者権利条約)

障害は個人のみの問題ではない。多様性ととらえる。

社会的障壁により生じる困難に着目

手話が言語として認められた

ろう者は手話言語を使用する言語的マイノリティ

聴者と聴覚障害者が共に生活できる社会を作ることを目指す

※「聞こえないあなたのみで良い」とするとらえ方

3. 「聞こえないあなたのままで大丈夫」と言うために

(1) 言えない背景・・・知らない

(2) 成人聴覚障害者を知る

①さまざまな聴覚障害者

i) 使用言語: 日本語・手話

ii) 補聴: 人工内耳・補聴器・補聴なし

iii) アイデンティティの違い(ろう・難聴・中途失聴)

②まずはあなたから→保護者へのことばかけ

(3) 聴覚障害を知る

極めて知られていない障害

(4) 手話を知る

【2. 自己肯定感と教育】

1. 自己肯定感

(1) 自己肯定感の高い子ども

- ・心が安定している ・健全な「欲」がある(向上心)
- ・失敗してもあきらめない(やればできる自信)
- ・人を信頼している(人から習うのが得意)

※自分の力を発揮しやすい状態

(2) 自己肯定感の低い

(自己否定している)子ども

- ・不安な状態 ・変化を嫌う ・傷つきやすい
- ・挑戦できない(失敗をおそれる)
- ・人を信頼できない(指導が入りにくい)

※不安が先立ち自分の力を発揮できない状態

2. 自己肯定感を高めるためには

- (1) 大人が子どもを受容する
- (2) 自己肯定感の連鎖

3. 教育とのジレンマ

- (1) 受容と教育は両立するのか？
「指導しないといけないから、受容ばかりしておられません」
- (2) 受容は指導が入る土台づくり
- (3) 先に傾聴した方が早い
- (4) 「この子なりに考えてやったこと」という信頼
- (5) 気持ちを語れる言語を育てることの重要性
※カウンセリングで感じる言語力の壁

4. 子どもたちを 受容できる自分になるために

(1) さまざまな人を知る

- ① 自分の範疇の外の人へのことは受容できない
→ 範疇を広げる
- ② 実際に会えなければ書籍や新聞からでも

(2) あなた自身の心の状態

- ① 自己肯定感は？
- ② 心に余裕がないと思ったら

【3. 手話で話すということ】

1. 手話は受容そのもの

(1) カタコトの手話でもとても喜ぶろう者たち

(2) 「そのままでもいいよ」というメッセージ
「聞こえる人にならなくていいよ」

(3) 手話で話す＝「あなたを理解したい」

(4) 手話を通じ合わせることで行動が変容したケース

2. 手話は気持ちを語れる言語

(1)「手話やと楽～」

(2)ワーキングメモリー

①口話の場合

読話に神経を集中→記憶できない・考えたり感じたりできない →「真剣に聞いていない」と誤解

②手話の場合

読話の負担が少なく、思いめぐらしたり記憶をたどったり、脳のさまざまな機能を活用できる。

3. 仲間と出会って変わる子どもたち

- (1) 中学までモヤモヤの理由がわからない
家庭内で孤立している子どもたち
親は通じているつもり。子どもたちは「わからない」
- (2) 高校で仲間と出会うことで変わる子どもたち
気持ちを通じ合う仲間
モデルとなる先輩との出会い
明るくなる
家庭での孤立が際だち、仲間との関係に没頭していく

4. 教師ができる役割は？

- (1) 家庭でのコミュニケーションが十分ではない子どもたちにとって大事な話し相手
- (2) 手話で大人の世界との橋渡し
- (3) 手話で聞こえる世界との橋渡し
- (4) 単に教科を教えるだけの役割ではない

【4. 子どもたちに母語を】

1. ダブルリミテッドの子どもたち

(1) ダブルリミテッド・バイリンガル

日常会話能力 (BICS)

学習言語能力 (CALP)

※第1言語・第2言語ともに日常会話能力でとどまっている状態

(2) インテグレーション経験者に多い

(3) 手話が伸びない

(4) 学習も伸びない

(5) 一見しゃべっているように見えるけど…

2. 聞こえない子どもたちの母語は手話

(1) 日本語ではインプットが不十分

(2) 手話は自然言語

手話で学習を進めていくことができる

(3) 母語の手話の上に日本語教育を

(4) 日本語教育界の最近の動き

「ろう教育は日本語教育のど真ん中」(庵功雄)

※ただし現在は、母語として手話を獲得していない

子どもたちが圧倒的に多いという課題がある

3. 教師の役割

(1) 手話獲得への取り組み

- ①乳幼児教育相談・幼稚部にて
- ②家庭で手話→子どもたちの孤立を防止
→良好な親子関係

(2) 手話で教科教育

発達全体を見据えた指導計画を

(3) 手話で議論や自己表現ができる言語力を

4. 一般の学校で難聴児に出会ったら

(1) 見逃さないで

(2) 聴覚特別支援学校と連携を

【おわりに】

1. 子どもたちへの願い

しっかり悩み、そこから一歩進める人に

- ・内省できる思考力
- ・相談できる言語力
- ・本から学べる読書力

2. さらに望むのは

本と同じように、手話による表現があふれ、
後世の聞こえない子どもたちが
さらに手話で学べる世界に

3. 先生になる皆さんへ